

2025 大阪・関西万博 国際赤十字・赤新月運動館

私たちがパビリオンに込めた思い

2025 年 4 月

はじめに：来場者の皆様へ

- ・国際赤十字・赤新月運動館（以下「赤十字パビリオン」）は、「人間を救うのは、人間だ。The Power of Humanity」という人道の理念を一人でも多くの来場者の皆様と共有したい、そして命を救うアクションに一步を踏み出していただきたいという想いから生まれました。この資料ではその制作・展示内容の背景についてご紹介いたします。

1 赤十字と万博のかかわり

- ・「一人でも多くのいのちと尊厳を守りたい」という想いは、150年以上前に赤十字がうまれて以来、連綿と受け継がれてきた赤十字の先達たちの願いであり使命でもあります。1863年にスイス・ジュネーヴで生まれた赤十字は、1867年にパリ、1873年にウィーンで開催された万博を赤十字普及の好機と捉え、パビリオンを出展。日本赤十字社（以下「日赤」）創立者の佐野常民は、この二つの万博を実地で目にしており、このことが日赤の創立と日本での人道支援活動の幕開けにつながりました。このあたりの歴史的背景の詳細は赤十字ウェブミュージアム特別企画「万博と赤十字：日赤発祥の原点は万博にあり」<https://www.jrc.or.jp/webmuseum/column/>もご覧ください。



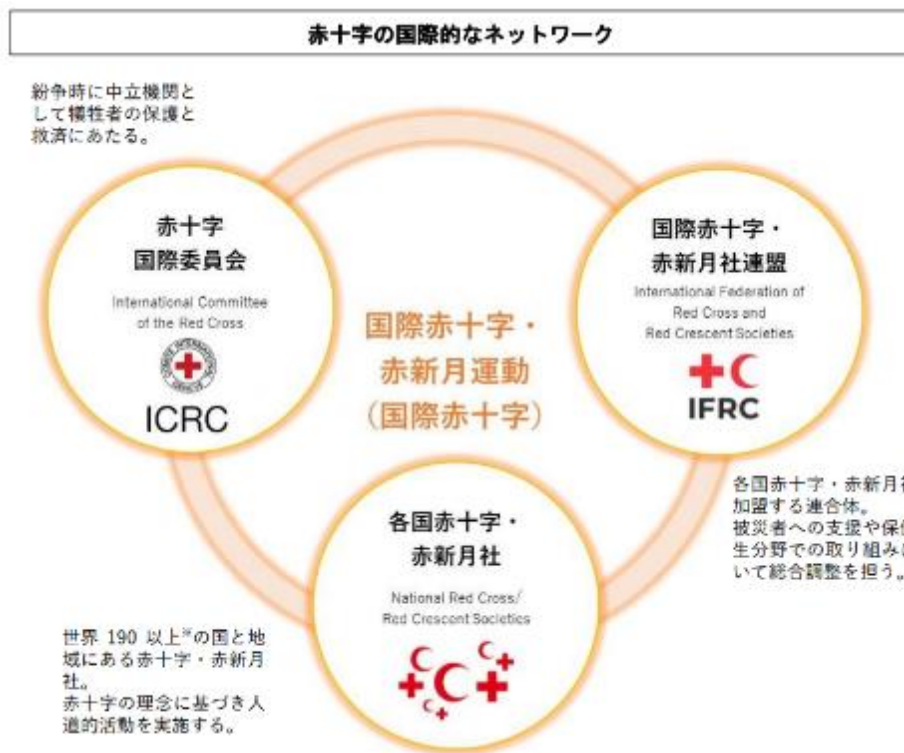
上：パリ万博(1867年)の赤十字パビリオン
左：ウィーン万博(1873年)当時の佐野常民

- ・その後赤十字は「国際赤十字・赤新月運動」の名において、セベリア万博（1992年）、ハノーバー万博（2000年）、愛知万博（2005年）、北京万博（2010年）、ミラノ万博（2015年）などに
出展・参加してきました。とりわけ 2005年の愛知万博（愛・地球博）では、日赤が企画・運営
を担い、公式参加者（国際機関）として国際赤十字・赤新月運動館を出展。延べ 1500人の赤十
字ボランティア・職員等による運営により、47万人あまりの来場者を迎えました。

2 「国際赤十字・赤新月運動」とは？

- ・辞書の定義によれば、「運動」とはある目的を達成するために活動したりあらゆる方面に働きか
けたりすることを指しますが、世界の赤十字の人道支援活動は「苦しんでいる人を救いたい」と

いう思い（運動体の目的）を共有するボランティアの力で支えられていることから（このために赤十字は宗教的な立場や国籍とは無関係に誰にでも開かれていることから）、自らを「運動体」と呼んでいます。具体的には下図の3つの機関が活動しており、これらは紛争・災害時のみならず、平時においても互いに協力・連携し、世界各地で人道支援活動を展開しています。






※赤十字はキリスト教など宗教とは無関係です（発祥国のスイスに敬意を表してこのマークが採用されました）が、その形状がキリスト教を連想させるため、一部イスラム圏の国ではこれに代わって「赤新月」マークが用いられています。日本赤十字社はこの各国赤十字社の一つであり、今回の万博ではパビリオン運営の事務局を務めています。

3 パビリオンの外観

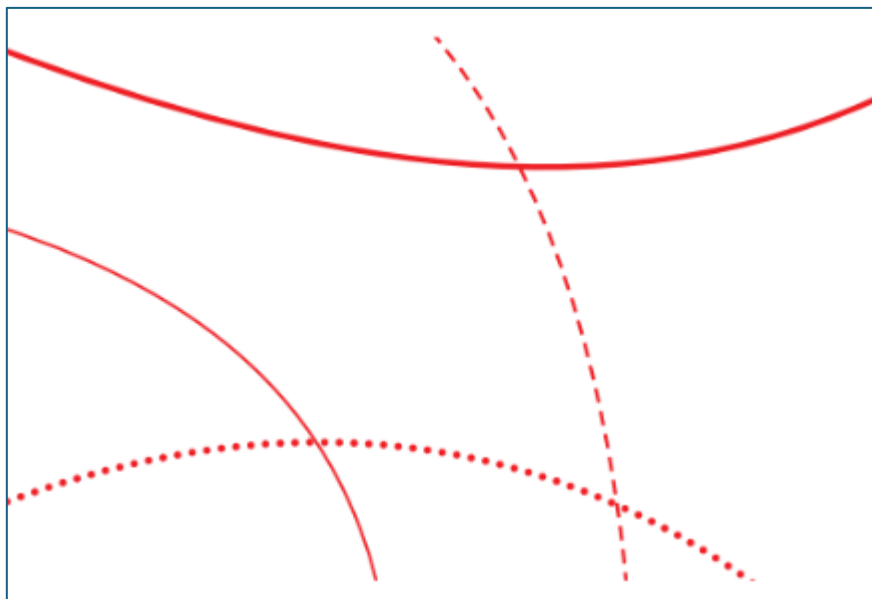


- ・正面右手側の壁面：紛争、災害、国内災害を象徴する三つの写真がパビリオンスローガン「人間を救うのは、人間だ。The Power of Humanity」を囲んでいます。各写真の背景情報は以下のとおりです。

	<p>2024年1月2日早朝、ウクライナの首都キーウ。ミサイル攻撃直後、ウクライナ赤十字社ボランティアレスキューチームが負傷者の救護にあたっている場面</p>
	<p>2023年3月16日、シリア・ラタキア。同年2月6日のシリア・トルコ地震の発生により、シリア・アラブ赤新月社は移動医療ユニットを展開、被災者に医療サービスを提供している場面</p>
	<p>2024年1月9日、能登半島地震で輪島市立大屋小学校救護所を受診した(2週間検診を受けていない)生後3週間の赤ちゃんを抱っこする日赤岡山県支部救護班看護師</p>

4 パビリオン各所を彩る赤い線（「コトセン」）

- ・各ゾーンの壁面、床や各種サインボード、映像コンテンツ内等に表示されている赤い線を「コトセン」と呼んでいます。人が体験した「コト」、何かをしようとする「コト」、今行っているコトがその人が持つ「コトのセン」となり、交わり、広がり共鳴しあい、大きな力となるイメージを象徴しています。



- ・ゾーン1 壁面にはそのコンセプトコピーが示されています。

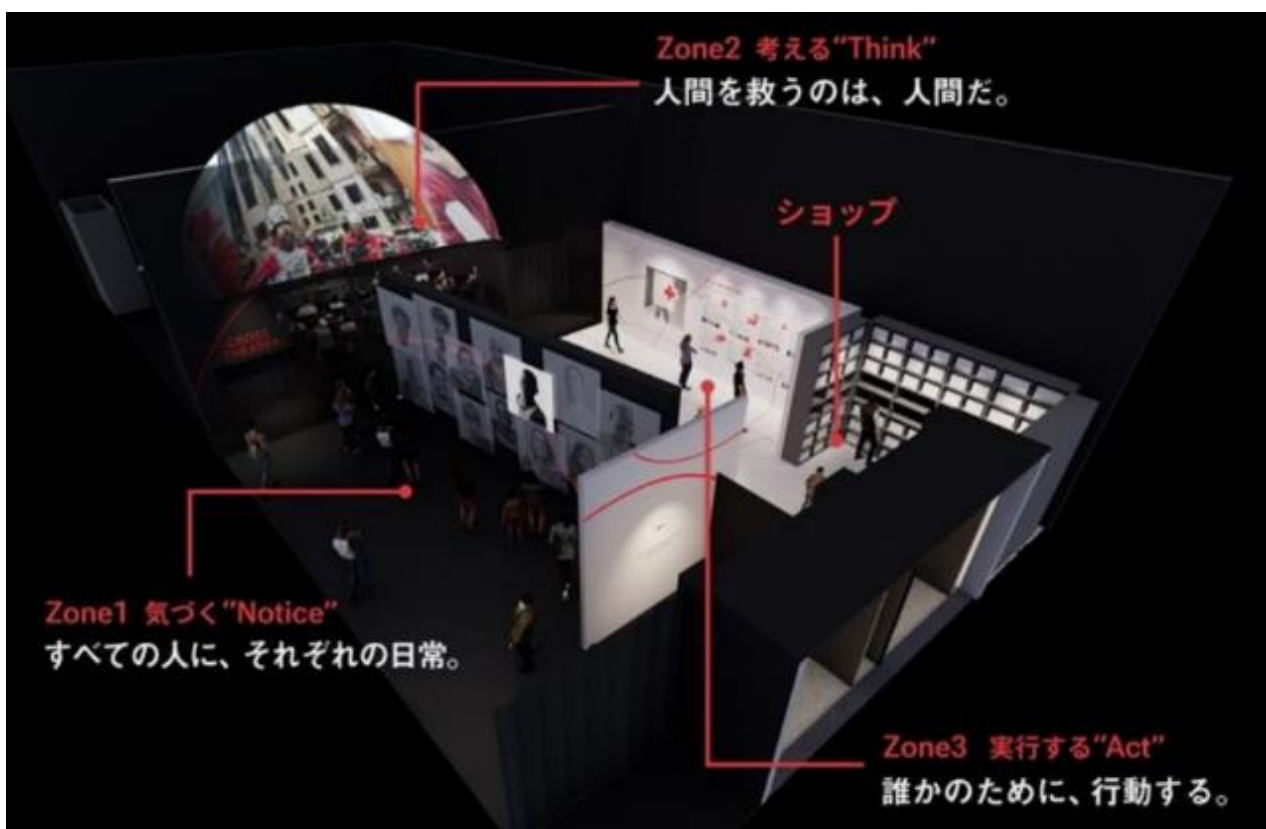
人それぞれの人生が一本の線のように
 未来へ向けてのびている
 人がだれかのために行動を起こす時
 二本の線は交わりそこに力が生まれる

Each person's life is like a single line extending into their own future.
 When one person takes action for someone else,
 their two lines intersect, and there, a new strength is born.



5 各ゾーンのテーマと詳細

- ・青少年赤十字¹の態度目標「気づき、考え、実行する」を各ゾーンに冠し、それぞれにのっとった展示構成としています。



¹ 青少年赤十字についてはこちらをご覧ください：日本赤十字社『青少年赤十字ノススメ』<https://www.jrc.or.jp/volunteer-and-youth/youth/pdf/seisyonen120905-04.pdf>

(1) ゾーン1「気づく」


- ・喧騒に満ちた万博会場から最初に足を踏み入れる場所として、シックな空間の中で様々な人種、国籍を持つ人々の笑顔が来場者を迎えます。約3分半の映像演出を通じ、普段は当たり前に行っている日常の尊さ、かけがえのなさを感じ取っていただきます。それは続くゾーン2で来場者が目にする厳しい人道危機の現実の序章としても位置付けられています。



- ・紗幕の人々の国籍は以下のとおりです。

① シリア	② 日本 ※ゾーン2で 登場	③ ミャンマ ー	④ 日本 ※ゾーン2で 登場	⑤ アフガニ スタン	⑥ シリア	⑦ エチオピ ア
⑧ レバノン	⑨ ハイチ	⑩ ハンガリ ー	⑪ ケニア	⑫ ウクライ ナ	⑬ バングラ デシュ	⑭ トルコ

- ・一見平穏な日常を送る人々に見えますが、②④⑥を除き、これらの人々はすべて赤十字の写真アーカイブから選ばれたものです。言い換えれば、赤十字の活動地で撮影されたものであり、何らかの紛争・災害に見舞われている人々です。
- ・②日赤香川県支部 大林武彦 職員、④石巻赤十字病院 千葉理沙 看護師はゾーン2の登場人物（プロフィールについては後述）です。⑥元シリア赤新月社職員ラガド・アドリさんも当初ゾーン2で登場予定でしたが、編集上の都合によりゾーン1のみの登場となりました（ラガドさんのエピソードは下記をご覧ください）。

<p>シリア</p> 	<p>2020年12月、シリアで撮影。下肢麻痺のため大半の時間を自宅で過ごさざるを得ない5歳のムハンマドは、シリア赤新月社のサポートを受けています²。</p>
--	--

² <https://shared.ifrc.org/record/8727>

<p>ミャンマー</p> 	<p>2019年7月7日、ミャンマー、イラワジ川デルタのマ・ンガイ村の子どもたち。2008年のサイクロン・ナルギスの襲来を契機に、子どもたちはミャンマー赤十字社等と協力し、簡単な救急法を学んだり防災対策に努めています。</p>
<p>アフガニスタン</p> 	<p>2019年4月17日、アフガニスタン西部地域ヘラート州。同年3月に同国を襲った洪水で被災した人々に支援物資が配布されました³。</p>
<p>シリア</p> 	<p>東日本大震災当時、千葉大学で日本語を学ぶ留学生だったラガド・アドリさん。被災地でのボランティア活動を経験し、人道支援活動に関心を持つようになりました。震災の年の2011年は中東各地の民主化運動「アラブの春」でシリア情勢が悪化した年でもあり、日本からシリアに帰国後、震災の被災地の光景がシリアの紛争地と重なって見えたといいます。2015年にはシリア赤新月社職員としても活動しています⁴。</p>
<p>エチオピア</p> 	<p>2021年4月6日エチオピア、アルバミンチで撮影。約7年前に自動車事故に遭ったこの車椅子の男性は、赤十字から現金給付の支援を受けています⁵。</p>
<p>レバノン</p> 	<p>2016年3月7日、レバノン：ザーレ、ベカーで撮影。非公式仮設居住地にいるシリア人の子どもたち。レバノン赤十字社やその他の人道支援団体は、祖国から避難した難民の家族にできる限りの支援を行っています⁶。</p>
<p>ハイチ</p>	<p>2010年1月、マグニチュード7の大地震に見舞われたハイチ。翌年11月、ハイチ、ポルトープランスで撮影。赤十字は避難民キャンプ</p>

³ <https://shared.ifrc.org/record/LyIPzLsdBwIwIYIkIzI0rrsl>

⁴ 日本赤十字社国際部「シリア：紛争下で人道支援を実現すること」『赤十字国際ニュース』第59号（2015年11月27日）https://www.jrc.or.jp/international/news/pdf/kokusai_No59.pdf

⁵ <https://shared.ifrc.org/record/RoINjixcbR16CxIVlyIMIGxDug>

⁶ <https://shared.ifrc.org/record/110405>

	<p>内の水と衛生サービスの提供について、ハイチ政府と緊密に連携しています。写真の少年その給水所を利用しています⁷。</p>
<p>ハンガリー</p> 	<p>2022年8月2日、ハンガリーで撮影。ウクライナからの避難民児童に対し、同国赤十字社は教育プログラムを提供しています。写真の少女はハンガリー語ができるウクライナの少女・クラウディア。赤十字が運営する幼稚園の先生に髪を編んでもらっています⁸。</p>
<p>ケニア</p> 	<p>2010年1月1日、ケニアで撮影。同国のマサイ族の人々にとって、牛は単なる収入源ではなく生活様式であり、富、誇り、繁栄の象徴といわれています。しかし同時に、家畜との密接な関係は感染症のリスクにもつながります。ケニア赤十字社は、感染症の早期発見や家畜のワクチン接種を行っています⁹。</p>
<p>ウクライナ</p> 	<p>2022年4月18日、ウクライナ西部ウジュホルドで撮影。二人は同年2月、紛争が発生して2日目に首都キーウの郊外にあるブチャの自宅から避難。支援物資を受け取るため赤十字の救援物資配布センターを訪れました¹⁰。</p>
<p>バングラデシュ</p> 	<p>2023年7月29日、バングラデシュ避難民キャンプで撮影。写真の二人はファテマと弟のバブです¹¹。2017年8月下旬から、ミャンマーラカイン州で暴力行為が相次ぎ、隣国バングラデシュへ92万人以上の人びと（2022年5月現在・国連発表）が避難をしており、今も避難民キャンプでの生活が続いています。</p>
<p>トルコ</p>	<p>2021年9月27日撮影。ムハンマド（写真左の青年）は才能ある19歳（撮影当時）の若きジャグラーであり、イラク戦争のため2014年にトルコに逃れました。ムハンマドとその家族は同国の赤十字社から</p>

⁷ <https://shared.ifrc.org/record/81918>

⁸ <https://shared.ifrc.org/record/8DlrD0ZH6IRIKI4IkIx11c0>

⁹ <https://shared.ifrc.org/record/LyIegRSqIwIYIkIzI0rrsl>

¹⁰ <https://shared.ifrc.org/record/XrIRj8QfwVOQFGIyLzIKIPRRsp>

¹¹ <https://shared.ifrc.org/record/3kIPm8acrIZIDIMI0IYpxHK>



現金給付の支援を受けながら、ジャグラーとしての夢を追い続けています¹²。

(2) ゾーン2「考える」制作の背景

- ・愛・地球博の赤十字パビリオンのメインシアターでは、ミスターチルドレンの楽曲「タガタメ」（と印象的な歌詞「子どもらを加害者にも被害者にもしないために、この街で暮らすために、まず何をすべきだろう？」）になぞらえた人道危機の現実、立ち向かう赤十字の姿の映像が上映されました。これに対し、今回の大阪・関西万博では、様々な映像コンテンツが世にあふれる現代において、どう愛・地球博と差別化し、付加価値をもたせるべきかについて、制作チームで議論を重ねました。その中で、「人」というものにもっと着目したい」「“人”の関心や行動を駆り立てるものはやはり“人”しかいない」といった考えが徐々にチーム内で共有されるようになり、被災者や支援者といった実在の「人」の証言をベースにした映像構成の検討が始まりました。
- ・「国際赤十字・赤新月運動」の世界の広がり、ますます混迷を極める人道危機の現実、そうした中でも「人間を救うのは、人間だ」をあきらめない決意、その思いを語りうる人やエピソードには何があるのか。あまたある赤十字のリソースの中、他方で限られた準備期間の中で、多くの候補素材を洗い出し、結果、以下のエピソードに絞りこまれました。なお、冒頭のシリア人の少女リンさん以外の証言は、今回のためだけに撮影したもの（簡単な質問のみで台本なしの撮り下ろしインタビュー）です。

(ア) エピソード①シリア紛争

i. 登場人物：シリア人の少女リンさん



- ・2010年1月、マケドニア（現「北マケドニア」）の難民キャンプでイギリス赤十字社が撮影した動画です。シリアから妹、母親とともにドイツにいる（だろう）父を探して避難する中での語りの場面です。彼女のプロフィール、現状などの詳細は不明です¹³。

¹² <https://shared.ifrc.org/record/ Y8IrwqbHXrrNt6lkIZIGIOyyue>

¹³ [v-TUR0007 interview IFRC Lin's story Gevgelija Macedonia | shaRED](https://shared.ifrc.org/record/ v-TUR0007 interview IFRC Lin's story Gevgelija Macedonia | shaRED)

ii. シリアの現状（2025年2月末日時点）

- ・2024年12月、バシヤール・アサド政権が崩壊したシリア。大規模な戦闘は終結したものの、「世界最大の難民危機」と呼ばれた危機的な状況は今も終わっていません。内戦が2011年に始まって以来、シリアではおよそ1670万人が人道援助を必要としており、これは内戦開始以来最も高い水準となっています。また、国内外で1000万人以上が避難生活を余儀なくされており、シリア全体の人口の約90%が貧困で生活しています¹⁴。
- ・2024年2月の情報によれば、国外に避難したシリア人は約536万人、国内で避難生活をしている人々は680万人。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）によれば、同国で人道支援を必要とする人々の数は1,530万人にも達します¹⁵。特に、食糧不足が深刻で、多くの人々が適切な医療や教育を受けられず、生活に不可欠な基本的なサービスが欠乏しています。

iii. 国際赤十字・赤新月運動の対応

- ・赤十字はシリアをはじめとする中東地域全体で支援活動を展開しており、日赤においては「中東人道危機支援事業」として2015年から活動を継続しています。同事業について、日赤のホームページでは次のように説明しています。「混乱の続く中東地域に対して、日本赤十字社は人々の苦難を少しでも和らげるため、2015年4月から、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）・赤十字国際委員会（ICRC）や現地の各国赤十字・赤新月社と共に、現地の人々に必要な支援を届ける事業を継続的に行っています。同年より日赤中東地域代表部をレバノンの首都ベイルートに設置し、現地のニーズの把握、事業実施、各組織との協力関係の構築に努めています。日本赤十字社は、2015年3月以降これまで、中東各地での支援活動のために医師32人、助産師2人、看護師45人、事務職員11人などのべ計90人をレバノン、イラク、パレスチナ、ヨルダンなどに派遣し、その支援実績は総額約12億円を超えました（2024年5月時点）。」詳しくはホームページをご覧ください¹⁶。
- ・2023年2月、シリアはマグニチュード7.8の巨大地震にも見舞われています（シリア・トルコ地震）。シリア・トルコ両国合わせ約6万人が犠牲となり、数十万の建物も崩壊したこの地震では、国際赤十字のネットワークが総力を挙げて対応しています。例えばシリア赤新月社は、救援物資の配布、被災者の救助活動、保健医療支援、水と衛生管理支援、離散家族支援、ジェンダーに基づく暴力の予防啓発、地震発生時等の適切な対応を伝える講習などを行っています。その詳細は日赤ホームページで紹介しています¹⁷。

¹⁴ 国境なき医師団「シリアでの国境なき医師団の活動は」（2025年2月21日）<https://www.msf.or.jp/news/syria.html> ； UNHCR「シリア緊急事態：避難を強いられる家族に支援を」（2024年11月）

<https://www.japanforunhcr.org/appeal/syriacrisis>

¹⁵ Spaceship Earth「シリア内戦とは？原因と終わらない理由や現在の難民の生活をわかりやすく解説」

<https://spaceshipearth.jp/syria-conflict/>

¹⁶ 日本赤十字社「中東人道危機救援」（2025年2月25日）https://www.jrc.or.jp/international/results/middleeast_jrcs.html ；

日本赤十字社「シリア：複合的な人道危機を生きる人々」（2024年5月15日）

https://www.jrc.or.jp/international/news/2024/0515_040777.html

¹⁷ 日本赤十字社「2023年トルコ・シリア地震」（2025年2月6日）

https://www.jrc.or.jp/international/results/turkey_syria_jrcs.html

(イ) エピソード②イスラエル・ガザ紛争

登場人物：大阪赤十字病院 川瀬佐知子 看護師



- ・川瀬看護師はこれまでにジンバブエ・コレラ救援事業（2009年）、バングラデシュ保健医療支援事業（2009年）、同国南部避難民救援事業（2017、2018、2019年）、ハイチ大地震災害救援事業（2010、2011年）、ネパール地震救援事業（2015年）など多数の国際救援活動に従事してきました。現在は大阪赤十字病院で病棟勤務に就きながら、同院国際医療救援部での活動も続けています。
- ・直近ではパレスチナ赤新月社医療支援事業のため2023年7月からガザ地区に派遣されており、同年10月7日、現地駐在中にイスラエル・ハマスの武力衝突に遭遇。ゾーン2ではその時の経験が語られています¹⁸。川瀬看護師は今回の経験をはじめ、「ガザの現実を一人でも多くの人に知ってもらいたい」と常々語っています。
- ・なお、川瀬看護師のインタビューシーンは、今回のために大阪赤十字病院の屋上（ヘリポート）で撮り下ろしたものです。

i. パレスチナの現状（2025年2月末時点）

- ・国連の報告によれば、今回の武力衝突で双方合わせて44,000人以上の死者が発生しており、特に女性や子ども、高齢者など脆弱な立場の人々が深刻な影響を受けています¹⁹。とりわけガザ地区は狭隘地に約200万人が住み人口密度が非常に高いため、感染症のリスクも懸念されます。またガザ地区は長年イスラエルによって封鎖されており、燃料、食料、医療品などの不足が続いています。さらには慢性的な電力不足や水の汚染問題も生じており、多くの住民が基礎的な生活必需品も入手できない状況です。若者の失業率が67.4%を超えており、経済は停滞しています²⁰。

ii. 国際赤十字・赤新月運動の対応

- ・現地の各赤十字・赤新月機関がそれぞれの強みを生かした対応を行っています。
 - ー赤十字国際委員会（ICRC）：人質解放の引き渡し支援、緊急保健医療支援、紛争当事者に対する国際人道法の順守の要請等
 - ーパレスチナ赤新月社：傷病者の搬送、救援物資の配布、避難所支援等

¹⁸ こちらのウェブサイトでも詳細を知ることができます。2023年11月17日12時半～13時40分「日本赤十字社職員によるガザ報告会見」<https://www.jnpc.or.jp/archive/conferences/36662/report>；川瀬佐知子「パレスチナ赤新月社医療支援事業（ガザ）（2023年7月3日～11月5日）」<https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/upload/265e56da46653cde95838deb96e80f6a.pdf>

¹⁹ 日本赤十字社「イスラエル・ガザ人道危機」（2025年2月28日）https://www.jrc.or.jp/international/results/Israel_Gaza.html；国境なき医師団「パレスチナでの国境なき医師団の活動は」（2024年12月11日）<https://www.msf.or.jp/news/palestine.html>

²⁰ パレスチナ子どものキャンペーン「「ガザ地区」を知ろう」<https://ccp-ngo.jp/palestine/gaza-information/>

- －イスラエルのダビデの赤盾社：傷病者搬送、血液製剤の確保等
- －エジプト赤新月社：ラファ検問所を通じた人道支援物資輸送等
- －IFRC：各国赤十字社のサポート等²¹

- ・日赤においては2023年10月の衝突以前から「中東人道危機救援事業」としてパレスチナを含む同地域での支援活動を展開してきましたが、今回の武力衝突を機に、「イスラエル・ガザ人道危機救援事業」として救援金の受付を開始（2025年3月末をもって終了）。この救援金は上記国際赤十字の活動のほか、日赤が行う救援・復興支援活動等に充てられます。

（ウ）エピソード③東日本大震災

登場人物：石巻赤十字病院 千葉梨沙 看護師（左）・藤田彩加 看護師（右）



- ・このエピソードの詳細は当パビリオンの特設サイトでも紹介していますが²²、以下にその一部を抜粋します。

「2011年3月11日14時46分。修了式を間近に控えた石巻赤十字看護専門学校の生徒たちは自習の時間を過ごしていました。ドーン——。突然の地鳴りとともに大きく揺れる校舎。これまでに経験したことのない強い揺れが長い時間続いたと、当時在籍していた学生は証言しました。後に東日本大震災と呼ばれることとなる日本の東北地方太平洋沖で起きたマグニチュード9.0の地震です。

地震発生時、海から約1.5kmの近さにあった石巻赤十字看護専門学校には、卒業式をすでに終えていた3年生を除いた2学年約80名の生徒と十数名の職員が校舎内にいました。現在、石巻赤十字病院で看護師を勤める藤田彩加さんもそのうちの一人。

「石巻ではその前にもいくつか大きな地震はあったのですが、2011年の地震は全く異なるものでした。当時、私は石巻赤十字看護専門学校の2年生で教室で自習していました。揺れが収まった後にみんなで屋外に避難しましたが津波の心配がありましたが停電が発生していたため、簡単に情報を入手できなくなっていました。「多分、防災無線が流れていたと思うんですけど、正直言ってその記憶はあまりないんです。当時はまだガラケーが主流だったんですが、何人かはスマホを使って、一瞬繋がった人がいて『女川（宮城県女川町）で10m観測したって書いてある』って。それを聞いてこれは、やばいんじゃないっていう危機感を覚えました。数年前のとは全然規模が違うと」そこで、より海から離れたところにある指定避難所の湊小学校へ移動を開始しました。道中では高台にいる人から大き

²¹ 日本赤十字社「イスラエル・ガザ人道危機」（2025年2月28日）https://www.jrc.or.jp/international/results/Israel_Gaza.html

²² <https://expo2025.jrc.or.jp/redCrossAndRedCrescentActivities/activities/article06/>

な声がかかりました。「急げ!」。声に押されて慌てて小学校に駆け込み、後ろを振り返ると黒い水の塊が背後まで迫っていました。」

…その後の顛末はゾーン2の映像の中で語られているとおりです。

- ・実際にはこの千葉看護師・藤田看護師以外にも多くの学生が自主的に被災者のケアや避難所の衛生管理などにあたったといわれています。例えばある学生は「津波が街を飲み込んでいく様を見て死を覚悟し、隣にいる友人と抱き合っ泣きました。でもすぐに“私たち、赤十字の看護学生だからやらなければならないことがあるよね”と、嘘みみたいな話ですが、そんな言葉が自然とでてきたんです」と語っています²³。
- ・震災当時、千葉看護師・藤田看護師を含む看護学生たちの避難先となったのは、石巻市立湊小学校。石巻市沿岸部が津波による壊滅的被害を受ける中、同校も1階天井まで浸水。ピーク時には1200人近くが同校での避難生活を余儀なくされました。近隣にあった石巻赤十字看護専門学校も被災し、当時の校舎は今はありません（現在の校舎は石巻赤十字病院敷地内に併設されています）。
- ・今回の撮影では、二人に看護学校があった場所及び湊小学校を再訪し、当時の経験を語ってもらいました。千葉看護師のインタビューシーンは湊小学校の教室で実施したものです。また、藤田看護師のインタビューシーンは現在の石巻赤十字看護専門学校の実習室で行ったものです。



石巻赤十字看護専門学校実習室



湊小学校屋上



湊小学校教室

(エ) エピソード④阪神淡路大震災

登場人物：日赤香川県支部 事業推進課 大林 武彦 課長



- ・2025年は阪神淡路大震災から30年という節目の年であり、来場者の多くの方が近畿圏からお越しになられます。このため、この震災に関するエピソードを何らかに取り入れられないかと考え、大林職員に着目するに至りました。
- ・大林職員は震災当時、大学4年生。尼崎市に住む友人が被災し、安否を気遣いました。しかし、このことについては本編中でも語られているように、当時はボランティア活動など何か具体的な

²³ 日本赤十字社事務局看護部 池田由美子／南斉真奈美／林容子／東智子「DVD『赤十字とは何か その教育の原点を問う』を制作して—3・11石巻で奮闘していた看護学生の記録」看護教育 53巻 10号（2012年10月）

アクションを起こすには至りませんでした。その時のもどかしさもあって、すでに内定が決まっていた企業を辞退し、日赤への入社を決めました。

- ・大林職員は現在、日赤香川県支部の事業推進課長として、赤十字のほぼ全事業に従事。年間を通じて多くの講習・研修を自らも講師として運営し、各種国内災害においても救護活動の最前線で指揮を執り、活躍しています。
- ・なお、インタビューシーンの背景は高松赤十字病院の屋上ヘリポートで撮影したものです。

(オ) 歌手 Uru さんの楽曲

- ・各登場人物の語りが終わられたのち、Uru さんの楽曲「夜が明けるまで」の歌唱がはじまります。もともとこの曲は赤十字の活動に共感してくださった Uru さんが、2024 年 5 月の赤十字月間 CM 用書き下ろししてくださったものです。その際、Uru さんはこの楽曲について次のように語っています²⁴。

「夜が明けるまで」は、赤十字の皆さんの活動に心からの敬意を込めて作らせていただいた楽曲です。曲を作るにあたって、HP やこれまでの活動、全国のスタッフさんのブログなどを拝見し、支援者として一人一人に寄り添う皆さんに改めて尊敬と感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。「夜が明けるまで」を通して、誰かを想う気持ちやそばにいたいという気持ちが、大切な人にそっと届いてくれたら嬉しいです。」

- ・今回赤十字パビリオンでこの曲を使用することについて改めて Uru さんに相談したところ、映像の内容に共感してくださり、特別に許可をいただくことができました。
- ・歌唱とともに現れる赤十字の映像・動画は歌詞のイメージに近いものを選んでいきます。最後は千葉看護師の言葉「相手の気持ちを想って、声をかけることができるのは、人間しかないと思っています」で締めくくられます。

²⁴ 日本赤十字社 HP「上白石萌音さん出演、Uru さん楽曲書き下ろしの新 CM 『赤十字は、動いてる！』一緒なら、救える。」篇（2024 年 4 月 30 日）https://www.jrc.or.jp/press/2024/0430_040515.html

(3) ゾーン3「実行する」



(ア) 石巻赤十字病院の赤十字旗

- ・ゾーン2の東日本大震災のエピソードにまつわる実物展示として、発災直後実際に1か月間石巻赤十字病院正面玄関前に掲げられ続けていた赤十字旗。石巻医療圏の唯一の拠点となった同病院の奮闘のあかしとして、普段は同院災害医療研修センターのロビーに展示されています。今回万博のために特別に移設・展示しました。
- ・ゾーン2の中でも現在の石巻赤十字病院の赤十字旗がはためく映像がでてきます（千葉看護師・藤田看護師のインタビュー時に撮影したものです）。来場者の皆様にはこの実物の旗を見ていただき、ゾーン2の印象を現実と結び付け、想いを深めていただければ幸いです。

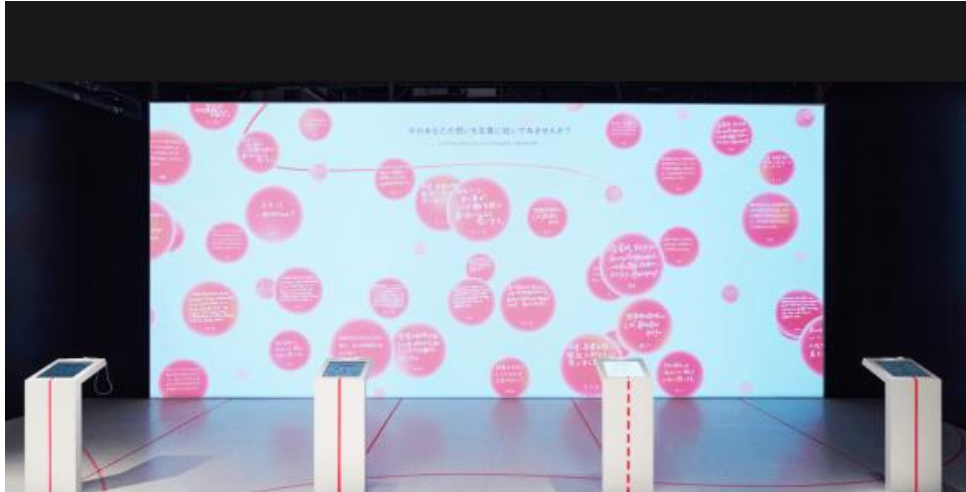
(イ) 活動紹介ウォール

i. 赤十字活動全般

- ・国際赤十字の活動を壁一面で幅広く紹介。国際・国内、有事・平時のカテゴリーにそって、以下の内容を紹介しています。壁にある「NFCタグ」という表示にスマートフォンをかざすと、特設サイトにリンクし、各活動の詳細記事を読覧することができます。「想いを行動に移すために」という標題には一人でも多くの来場者の方が命と尊厳を守る一歩を踏み出すきっかけになることへの願いを込めています。<https://expo2025.jrc.or.jp/experience/#action>

ii. 日本赤十字社の活動

- ・赤十字活動紹介と並んで「日赤の」活動・参画方法の紹介スペースも設けています。こちらは日赤の各種サイトのリンク集であり、こちらも同じく「NFC」の表示にスマートフォンをかざせばを通じて各種サイトを読覧でき、それぞれの詳細を知ることができます。
<https://expo2025.jrc.or.jp/experience/#action>



(ウ) メッセージウォール

- ・このゾーンのテーマが「実行する」をテーマにし、また、「今のあなたの想いを言葉に紡いでみませんか？」とあるように、来場者の皆様の想いを形にさせていただきたいと考えています。なお、メッセージ投稿は特設サイトからも可能です。<https://expo2025.jrc.or.jp/experience/#message>

(エ) ショップ

- ・「コトセン」をあしらったグッズや日赤公式キャラクター「ハートラちゃん」グッズ、またムーミングッズなどを販売しています。
- ・ムーミンと赤十字は歴史的に深いかかわりがあります。ムーミンの原作者、フィンランドのトーベ・ヤンソン（1914～2001）は、第二次世界大戦の影響を受けながら創作活動を行っており、ムーミンの物語はその戦時中の混乱や不安から逃れるために書き始めたといわれています。ヤンソンとフィンランド赤十字社もまた深いかかわりをもっており、ムーミン誕生より前の1930～40年代、ヤンソンは同社のポストカードのデザインを行うなど、そのイラストやデザインは赤十字活動の支援のためにも使用されてきました²⁵。なお、2025年はムーミンの小説出版80周年という記念すべき年でもあります²⁶。

おわりに

- ・「人間を救うのは、人間だ。」この人道の想いは、一人ひとりの国籍や宗教、思想・信条、さらには時代を超えて、誰もが人間らしく生きるために不可欠なものだと考えています。「いのち輝く未来社会のデザイン」を掲げる大阪・関西万博で、そして赤十字パビリオンで、この当たり前の、けれどもしばし忘れがちなこの人道の心を、一人でも多くの来場者の皆様と分かち合えることを願っています。この資料が少しでもその糧になれば幸いです。

²⁵ 日本赤十字社 HP「ムーミンの生みの親「トーベ・ヤンソン」と赤十字」（2022年8月）

https://www.jrc.or.jp/about/publication/news/20220801_027571.html

²⁶ <https://www.expo2025.or.jp/news/news-20250303-02/>